



No. 180

ティークレイク

Tea Break

笑顔と後悔の狭間にて

会員 正林 真之

もうかなり前といった感があるが、松倉秀実先生の葬儀のときに、隣に居た長年の友人が複雑な表情をしていた。それはそれは大勢の参列者が居る中でも、彼一人だけが、ことさら特異な存在に見えた。松倉先生は、心の底からスティーブ・ジョブズが大好きであった。尊敬もしていたし、敬愛もしていた。そしてなぜか偶然にも、松倉先生は、そのスティーブ・ジョブズと同じ病気で、同じ年恰好の時分に亡くなった。

参列者があそこまで多くなるのは、それぞれ松倉先生の人徳と、今までの業績によるところが大きい。ここまで多くの参列者が来る葬式というのは、そうはあるまい。けれども、隣に居る彼も、相当に有名であり、かつ、その業績も、当の松倉先生以上のものがある。そしてその彼も、なぜだかスティーブ・ジョブズが大好きである。けれども、松倉先生と彼が異なるのは、彼はその当の松倉先生のことが大好きであったということだ。

むろん、同じ弁理士であるから、商売敵である。そしてまた、事務所の規模も、今では先生の事務所よりも大きい。かつては、それはそれは小さな事務所であった。それなりの対抗意識もあったには違いない。けれども、彼の松倉先生に対する敬愛は、そういったことでは計り知れないものがあつた。それは、何かと批判の多い彼の行動に対して、松倉先生はそれなりの理解を示してくれていたからなのかもしれない。ともかく、何かと敵の多いこの業界において、松倉先生だけは、かなり信奉し、敬愛をしていたようだ。

その彼が、松倉先生の葬儀に出ている。その心中は、いかばかりのものであつたのだろうか。けれどもその彼がふと、「もし俺がこうやって死んだら、やはり同じくらいの参列者が来るのかな...」「いや、喜ぶやつの方が多だろうな、きっと...」と寂しそうに呟いた。彼の今

までの言動その他を見れば、それこそその死を喜ぶ同業者も多いだろうというのは、容易に想像がつく。特に、老舗の事務所の先生などは、歓喜するに違いない。

けれども、その彼の呟きを聞いたときには、「こんなところまで対抗意識を持つものなのか」と、少々あきれたような感覚すら持ったものである。

しかしながら、その彼の病気は、悪性リンパ腫。れっきとしたリンパの癌である。しかも T 型。T 型のリンパの癌が直る可能性は、極めて少ない。聞けば、内臓転移が見つければ、あと一か月も持たないと言うではないか。彼が寂しく呟く裏には、そういった事情があつた。

けれども当時の私には、松倉先生の死を前にしながらも、隣に居る彼が1か月後にはこの世に居ないという現実のほうが、不思議に思えた。けれども彼は、「余命宣告っていうのは、いいよな。突然に終わるわけではないから、何かと準備もできる。考える時間もできる」、そして「締め切りを見据えながら、焦りつつも一生懸命に仕事するのは、弁理士らしくて良いよな」と、いつものように、カラカラと笑つた。

末期癌用の癌病棟というのは、基本的には、治療による退院というものが無い。ベッドや個室が空くというのは、その患者がこの世から消え去つたことを意味するだけである。それ以外の意味はない。そうであるからなのか、ここに従事する人も含めて、ここには特有の暗さがある。病院食をつまみながら、寝間着のまま、「今まで、とにかく遮二無二に働いてきた。寝る時間も惜しんでね。でも今までの睡眠不足分は、ここで全て取り返したよ」と笑い、「まもなくそれも“永遠”になるけどな」と、冗談にならない冗談を言つた。今となつては、そんな

な彼の、この病棟では唯一とも言えた明るい笑いが、とても懐かしい。

そして彼は続けて言った。「自分が死ぬことについては、仕方ないと思っている。やりたいこともやってきたから、自分の人生に悔いはない」。それはそうだろう。一代で200人を超える特許事務所を作ることなど、そう誰にでもできることではない。特に、今の日本の状況では尚更だ。そんなことを考えている私に向かって、更に彼は続けて、「でもね、皆とお別れすることになるのだけは、寂しい。本当に寂しい。僕は本当に仲間には恵まれた。今まで本当にどうもありがとう」と、本当に寂しそうに言った。あまりのことに耐え切れず、僕は思わず病室を出た。

今では日本人の二人に一人が癌になると言われるが、そういった話を聞くたびに、松倉先生と彼の面影を思い出す。「まあ、あまり悲しまず、君は君の人生を楽しんでくれよ」という臨終での笑顔に対して、私も「ああ、ゆっくり休んでくれ」と笑顔で返した。けれども本当は、心の内を正直に出して、素直に泣いたほうが良かったのか。

そしてまた、今の自分には彼以上のことができているのか。もちろん、できていなかったとしても彼は私のことを責めることはしないだろうが、どのくらい辛い別れであったのかをもはや彼に伝えることはできない。本当にこれで良かったのかと、これだけが大きな心残りといえば、心残りなのである。